

論文審査の結果の要旨

氏名 太田貴之

本論文は、近世日本の勸善懲悪文学を代表する作品と目される、曲亭馬琴『南総里見八犬伝』（以下『八犬伝』）の倫理思想を、物語中における善・悪の具体的な描かれ方に即して読み解く試みである。従来の思想史研究において、『八犬伝』の善悪観は、儒教道德の型通りの理解を出ないものとされ、踏み込んだ探究がなされることは少なかった。本論文は、『八犬伝』における、懲らすべき悪、勧めるべき善の具体的内実を明らかにし、これを日本思想の善悪観の様態としてあらたに位置づけ直そうとする意欲的な試みである。

『八犬伝』は、安房里見家と扇谷管領家の対立・抗争という史実の枠組みの中に、八犬士の物語という虚構が組み込まれた、勸善懲悪「稗史」である。論者はまず、近世の史論や朱子学的な善悪論を参照しつつ、虚構において歴史を描くということの意味をあらためて問い直す。そこから論者は、『八犬伝』における勸善懲悪が、儒教的因果応報観にもとづく歴史叙述の枠には収まりきらぬ幅を持つこと、また、「荒唐無稽」な物語は、歴史世界に実在する善悪を、その存在根拠をも含めて捉え返すために必要な装置であったことを明らかにする。即ち、『八犬伝』の世界は、善悪が現象する場としての「歴史世界」と、善悪の実質と根拠がそれとして描かれる「伝奇世界」とから成っており、二つの世界のありようは、史観としては、儒教的天道史観と中世的怨霊史観とに、善悪の理論としては、朱子学的善一元論と仏教的な煩惱・執着論に、それぞれ対応していることが示される。(序章、第一章)

論者はさらに、伝奇世界の内実を丹念に分析し、『八犬伝』における善悪の実質が、神女伏姫の「慈悲」と怨霊玉梓の「嫉妬」に集約されていることを示す。しかも、この「慈悲」（善）と「嫉妬」（悪）は、個の救済という、儒教的な人倫・祖先祭祀の倫理においては慰撫しえない要求に根ざしている点において、根源的に一つのものであることが明らかにされる。そして、伏姫と玉梓とに体现される善悪を分かちものは、儒教的な善行とは異なる救済の論理が与えられているか否かの違いにあり、伏姫においては、それが、儒教的五倫からはこぼれ落ちる、母と子どもたち(兄弟)の関係の中で獲得されているとする。即ち、「八犬士結集」という、仁義八行に属する善行とは異なるもう一つの物語は、家優先の倫理の枠組みの中に探り当てられた、個にかかわる倫理の可能性を示すものであったと結論づけられる。(第二章、第三章、終章)

以上、本論文は、通俗道德の反復にすぎないものと見られてきた『八犬伝』の勸善懲悪世界が、その具体的展開の内に、個としての他者の救済という根源的倫理への問いを含み持っていることを明らかにした点において、高い評価に値する。一方で、分析の枠組みとして用いられている朱子学や仏教の理解がやや簡略にすぎること、同時代の他の勸善懲悪文学群に対する本書の位置づけが必ずしも明確でないことなど、問題がないわけではない。しかし、それらはむしろ今後の研究の深化にまつべき課題である。以上により、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断する。